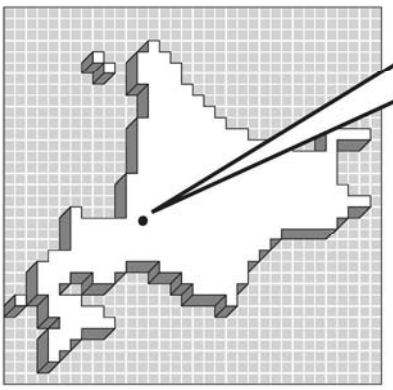
連載　わがマチの自慢　No.8



江別市

― 健康都市えべつ ―

わがマチの自慢第八回は、江別市を取り上げ、ランドマークをテーマに紹介する。

1．江別市のランドマーク

石狩平野のただ中にある江別市を東西に国道一二号が貫いている。東端（岩見沢市側）から西端（札幌市側）へ向かう道すがら、石狩川、国道三三七号を渡す巨大な吊り橋美原大橋、王子エフテックス江別工場の煙突、市民会館、交差する道央自動車道、酪農学園、道立図書館、道立自然公園野幌森林公園内にある北海道百年記念塔（札幌市）など、通過者が頼りにする標識代わりに、これらのランドマークが平坦なマチを特徴づ

（石狩川に架かる美原大橋）

（道立図書館）

（王子エフテックス江別工場の遠景）

（野幌森林公園）

けている。そしてその南北に江別市の面積の四割を占める農地が広がり、札幌などの都会では見られない様々な景観を提供し、市民に潤いを与えてくれている。

2．記憶のランドマーク

明治以降の江別の歴史を顧みると、明治一一年八月に江別太（現在の王子地区周辺）に屯田兵村が置かれ、同年一一月に江別村が誕生した。明治一五年、官営幌内鉄道が開業し江別駅が設けられると、石狩川水運と鉄道輸送の結節点として市街地が形成された。その後あらためて江別兵村、野幌兵村が設けられ、明治一七年以降三年間にわたり屯田兵四三二戸が入植し開拓事業にあたった。屯田兵以外の開拓も多くあり、中でも新潟県人による北越殖民社は明治一九年に江別太へ一七戸、明治二三年には野幌南部へ二〇四戸の入植を果たし、稲作を成功させるなど大きな成果を挙げたとのことである。明治の中ごろに工業が芽生え始め、明治二四年に江別太で煉瓦工場が操業し、ほどなく北海道炭礦鉄道による野幌煉瓦工場が作られ、鉄道資材の生産も行われたとのこと。明治三〇年には市街地の大半を失う大火に見舞われたが復興をとげ、明治四一年富士製紙北海道工場（現王子エフテックス江別工場）が操業を開始し、労働者も集まり、大正五年には町制を施行することとなった。煉瓦工場は現在も三つの工場が稼働しており、平成一六年一〇月に「北海道遺産」第二回選定分として「江別のれんが」が認定された。市内には小学校やサイロ、民家など四〇〇棟以上のれんが建築物が美しい姿で現存している。

（煉瓦工場）

また、江別市は陶器の町としても有名で、北海道の陶芸の中心地的存在となっており、毎年七月第二土・日曜日にＪＲ江別駅前周辺と江別市セラミックアートセンター（江別市西野幌一一四－五）で

（やきもの市）

（セラミックアートセンター）

「えべつやきもの市」を開き、三〇〇以上の出店がある大規模なものとなっている。江別の窯業は小森忍氏に負うところ大で、氏は日本における釉薬研究の第一人者で、より良いやきものを求めて流転し、昭和二五年、六〇歳の時に江別にたどりつき、以後七二歳で没するまで、北海道の窯業と陶芸の発展に貢献したとのことである。セラミックアートセンターでは、江別のれんがの歴史を紹介するコーナーや小森忍氏の功績を作品とともに紹介するコーナーなどがある。

農業においては、近年、栽培の難しいハルユタカという麦の品種を初冬まきという技術で克服し、全道の生産量の半分以上を占めている。高タンパクで品質が高いハルユタカはラーメン、うどん、パンなどの加工品の評価が高く、ラーメンは江別小麦めんとして商品化され、市内の食堂、レストラン等の飲食店で提供されている。この初冬まき技術の開発もやがて記憶に留められることとなるだろう。

3．活動のランドマーク

江別市は、都市型農業を推進しているという。そのため、市民と生産者との顔の見える関係を築いていくことは重要なことであり、市民に農業への関心を深めてもらう機会を提供する場を設け、産地直売所や貸し農園（観光農園）などを通じた「まち」と「むら」のふれあい交流・体験活動を行っていこうと平成一七年五月に『江別市「まち」と「むら」の交流推進協議会』が設立された。

産地直売所は市内に一三か所、貸し農園は八か所あり、直売所マップおよび貸し農園マップという立派なパンフレットを作成し、紹介に努めているし、各直売所はそれぞれ独自の商品構成で、新鮮な野菜を揃え、人気を博している。また、平成一七年一二月には市内農業者による加工品の部会が設けられ、交流推進協議会の活動が部会間のネットワークを活かした通年の取り組みへと拡がった。

他方、生活様式の多様化や食料の消費及び供給構造が大きく変化する中で、「食」の安全・安心に対する関心が非常

（まちとむら（土曜市））

（小麦圃場での食育活動）

に高まっている。こうした「食」に関する情報を正しく理解し、望ましい食行動を実践するためには、「食育」をさらに推し進めることが重要である。「食育」関係者が連携して食育推進ボランティアを育成し、地産地消の推進、「食」の体験学習など地域の特性を活かした食育活動を支援するため、平成一七年五月に農業生産者、食品事業者、消費者、行政・教育関係者から構成される「江別市食育推進協議会」が設立された。平成二三年一二月には「食育推進計画」が策定され、食育推進活動がより活発化し、例年、関係機関の協力のもと、小学生を対象とした農業体験学習などを通じた食育活動が市内各地で実施され、近年はその対象を中学生、高齢者にまで拡げている。

江別市は、これらの活動を軸に食育推進の基本理念に掲げる『市民一人ひとりが、いつまでも健康で、豊かに暮らす「健康都市えべつ」の実現』をめざしている。

4．未来へのランドマーク

江別市は、風土、歴史、生活において北海道を象徴するマチである。市民に尋ねると、「山や崖のない平坦な土地柄で、自然災害も少なく、生活する上でのストレスがなく、生活圏として不自由のない住み良い町」だという。それは今後も次世代が安心して暮らせるマチであることを意味する。

他方、課題として、少子高齢化の波は江別市も例外ではないこと、札幌のベッドタウンとしての性格から雇用や都市機能などの求心力が伸びず、現在では昼夜間人口比率が北海道三五市で下から三位、一七九市町村全てでも下から九位と極めて低いことが挙げられる。市としては、雇用の受け皿を作り、四つある大学の卒業生を定住化させていきたいとしている。

「健康都市えべつ」とは、人・まち・社会すべてが健康なまちであることをめざしているという。「人の健康」とは生涯を通じ、心身ともに健康で安心した暮らし、「まちの健康」とは市内経済が活性化、雇用の確保で、安定した社会制度と支える確かな財政基盤、「社会の健康」とは美しい自然やまち並み、安全な住環境、道路などのインフラ整備を意味するという。

（写真提供：江別市）

〈取材後記〉

記者の江別に対する記憶の中に、国鉄があった当時、汽車が江別駅に停車すると、車窓から煉化もちを売る売り子さんの姿があった。「健康都市えべつ」の市民たちは将来どのような思い出を胸に刻んでいるのだろう。

一般社団法人　北海道地域農業研究所
特別研究員　西　野　義　隆